

「なあ、笹原。雨さ、もっとひどくなってね？」

「うん……帰れるのかな」

困り顔の椎名くんに頷きながら、店の外を眺める。

道路は冠水するんじゃないかってくらいの水嵩で、道行く人たちの足元は雨水でびしょ濡れだ。この店から移動するだけでも苦勞しそう。

大分ぬるくなったホットラテを飲みつつ、スマホをいじる椎名くんを盗み見た。濡れて後ろに流した前髪のせいで、端正な顔立ちが際立っている。朝から忙しくしていたから、その光景が見られたことを褒美として受け取っておこう。

椎名くんと営業に来るはずだった石橋くんが高熱のため欠勤して、たまま手の空いていた私が代打になったのが今朝。必死に内容を頭に詰め込みながら、電車を何本も乗り継いだ田舎町での営業を終えた途端、急な雷雨で電車が止まってしまった。

復旧を待つために喫茶店へ入って大分経つ。話が弾んで楽しかったものの、もう外が暗くなっていた。

ラッキーだったのは、今日が金曜日だということ。明日が休みだということで、気持ちにゆとりが出る。

もう一度電車の状況を見ておこうと、私もスマホを開いた。慣れない地域にいるせいか、いつ頃電車が動くかの目処も立たない。変化のない運休状況を眺めていると、椎名くんが「あー……」と机に突っ伏した。

「やっちまった」

「ん？ どうしたの？」

「笹原が帰れないかもって言うからさ、この辺のビジホ見たんだよ」

相変わらず眉尻を下けている椎名くんが、自分のスマホ画面を私に向けてくれる。覗き込んでみると——ビジネスホテルの空室状況が、全ての画面だった。

「え……泊まるくらいの雨なの？」

「ここらへん、雨降ると冠水でよく電車止まるっぽいんだよな。リサーチ不足だった」

「いや、普通そんなことまで調べないよ。運が悪かったよね、私たち」
「……やっぱ笹原は優しいよな」

顔を上げた椎名くんの嬉しそうな顔に、ドキッと心臓が跳ねた。

椎名くんは同期で同郷の私を、何かと気にかけてくれる。

でも、勘違いしてはいけない。彼には、大学生の頃から片想いしている子がいる。それが理由で、秘書課の美女も振ったというのは有名な話だ。

「……他のホテル、私も探すよ」

「いや、田舎すぎてねえんだよな。あとは……ラブホ？」

「ラ……」

「行く？ 手え出さない保証ねえけど」

急に妖しい笑顔を向けてくる椎名くん、顔が赤くなるのが分かった。勘違い、させないでほしい。でも、椎名くんは私に手を出してもいいと思っっているということ。

嬉しくて恥ずかしくて、とつさに俯いた。その途端、目に飛び込んできた胸の膨らみに、すっと心が冷える。

……ダメだ。私は椎名くん、偽っている。だって――。

（もしエッチしたら……ブラにパット三枚も入れてるのが、バレちゃう！）とても切実な悩みだった。大学時代に、「やっぱり、おっぱいがないとな……」という理由で彼氏二人に振られている。

だから社会人になってからは、ずっと三パットスタイルで胸を偽装していた。きつと“ない”から“ない”より、“ある”から“ない”の方が、ガツカリされるだろう。

「……ジョーダンだよ。そんな悩むなって」

俯いたままの私の頭に、ポンツと優しい掌が置かれる。全然嫌じゃないのに、誤解されてしまった。

（でも「おっぱいがないけどいい？」なんて……聞けないよっ！）

保身が上回って、立ち上がった椎名くんを見上げることしかできない。そんな不甲斐ない私に、椎名くんは笑いかけてくれる。優しい。好き。

「とりあえず時間潰せて、もしもの時にそのまま朝まで居座れるとこ行こうぜ。駅前にカラオケあったよな」

いつもと同じ調子に、私も笑顔で「分かった」と返せた。

「その前にコンビニで傘買ってこ。ってか、もう売り切れてつかも」

「そうになったら、代わりに着替えを買わないとね」

「……あー、スーツじゃねえ笹原か。我慢できっかな」

「ん？ 何のこと？」

「いや、こっちの話。行こうぜ」

店の出口へ向かう椎名くんの後を追いながら、私はまだこの状況を正しく理解していかなかった。

（まあ、なんとかなるよね）

そんな軽い気持ちで、椎名くんについていった。

でも——それがどれだけ甘い考えだったか、思い知ることになる。



椎名くんがカードキーを差し込むと、ドアからピッと開錠の電子音が鳴った。

「え、つと……ここ？」

「……うん」

黒いマットが敷かれた部屋は、想像よりこじんまりしていた。チラッと椎名くんを見上げれば、とても気まずそうな顔をしている。

結局、コンビニに寄ってから辿りついたカラオケ店は満室だった。隣にあるネットカフェも覗いてみようとして来てみれば、完全個室の鍵付きVIPルームが、残り一室で奇跡的に空いていたのだ。

移動しただけで、全身はびしょ濡れ。正直、またどこかへ歩いていく気

力はなかった。たまたま椎名くんがこのネットカフェの会員だったこともあり、「VIPなら、まあまあ広いらしい」という言葉も後押しになって二人で入ったのだ。

初心者の私には、受付が無人なことも、アプリをかざすとカードキーが出てきたことも、何もかも新鮮で少しはしゃいでしまった。椎名くんはそんな私を楽しそうに見ながら、スマホのフロアマップを片手に施設のサービスを教えてくれて……でも着いた部屋の狭さに、足が止まってしまった。正直、目的は違えどラブホテルの方が二人の距離は取れる。ここに二人で寝転がったら、だいぶ気まずそう。

けれど、濡れた身体が冷えてくしゃみが出ると、椎名くんが私を狭い部屋へ押し入れた。

「とりあえず着替えよ。な？」

「……うん、そうだね。ありがとう」

心配してくれるのが嬉しくて、とりあえず中に入った。

横殴りの雨の音がよく響くし、たまに隣の部屋から笑い声が聞こえてくる。でも何を喋っているかまでは分からないから、防音機能は一応備わっているようだ。

「俺も着替えてくる」

椎名くんはコンビニで買ったタオルを肩にかけながら申し訳なさそうな顔をしていた。シャワールームがあるのは男の人のみで、私が入れないことを気にしているらしい。けれど女性用があっても、私はこういう場所でシャワーは浴びられないタイプだ。

「うん。いつてらっしゃい」

「……いいな。笹原にそうやって送り出されるの」

笑顔で手を振ったら、椎名くんは嬉しそうに「じゃ、いつてくる」とドアを閉めた。

自動で鍵のかかった音がした刹那——私は急いでシャツのボタンを外しにかかる。ブラの中にあるパットが雨を吸収して、重いし冷たいし滴ってくるしで最悪だった。

ボタンを三つだけ外してベチョベチョのパットを取り出すと、やっと解放された気分になる。そのままコンビニで買ったゴミ袋に、パットを放り込んだ。

バスタオルを袋から取り出したところで、外から雷鳴が轟いた。そこにピッとドアキーが解除された音が混じった気がする。でも、椎名くんは出ていったばかり。

帰ってくるのはまだ先だろうと、バスタオルで髪を吹いていたら……勢いよくドアが開いた。

「笹原、これ先に——」

椎名くんの手から、茶色のブランケットが落ちる。一息ついたら取りに

行こうと言っていたのに、私が寒そうにしていたから持ってきてくれたよ
うだ。

こんなにすぐに戻ると思わなかった私と、こんなにすぐに脱いでいると
思わなかった椎名くんは、二人して固まってしまった。彼の目は、私のス
カスカな胸元に釘付けだ。

（何か……言わないと。でも、何を……？）

混乱している私より先に、椎名くんが動いた。座ったままの私の元に滑
り込んできた彼は、躊躇なく私の腰を掴んで顔を寄せてくる。ガバガバの
ブラから丸見えの胸を、ガン見だ。

固まったままの私を、椎名くんは若干血走った目で見てくる。そして開
いた口から出てきた言葉は――。

「これ……俺が一目惚れしたおっぱいじゃん……笹原だったのか」

「……ん？　なんて？」

衝撃発言で隠すことすら忘れていた胸に、熱い吐息がかかる。その熱が身体の冷えを思い出させて、私は少し身じろいだ。でもガッチリ掴まれた腰は動かない。

「この、ほくろで出来た三角形。懐かしい……。会いたかった」

自分でも知らなかったほくろに話しかける椎名の顔が、どんどんと近づいてきて――。

「……ひゃっ」

ちゅぷ♡と椎名くんが、寒さで立ち上がっていた乳首を口に含んでしまった。まさかそんなことをするなんて思いもせず、また強めに腰を引こうとしたのに、やっぱり動けない。すごい力だ。

（……え？ え？ ど、どういう状況!？）

なんでこんなことになったのか分からなくて、椎名くんの頭を引き離そうと押す。でもそのせいで離れようとしないう彼の唇が、ちゅぷ♡と吸い

ついできた。

「あ……っ♡椎名、くん……何して、っ……♡」

びっくりと身体が跳ねた時、隣の部屋から再び笑い声が響いてきて、ここがどこだかを思い出す。

「あ、やつ♡……っ♡だめ、っ♡」

口元を掌で押さえたせいでくぐもった声が室内に響くと、やつとのこと
で椎名くんが顔を上げた。二年間一緒に働いてきたのに、見たことのない
雄の顔をしている。

「わりい。ツンッて可愛くとながった乳首が誘ってくるから、つい」

「さ、誘ってないよ。寒くて、あ、んん♡」

「ああ、忘れてた。風邪引かないように、脱がねえとな」

今度は指できゅっ♡と片方の乳首を摘みながら、椎名くんはもう片方
の手で私のシャツのボタンを器用に外していく。その間に、摘んだ乳首の

先端をスリ♡スリ♡と優しく擦ってくるから「んんっ♡」と勝手に声が出た。

「あ、っは♡椎名くん、っやめっ……♡んっ♡んッ♡」

「あー、笹原のおっぱい……想像以上にえろくてやべえ。……なあ、大学三年の時さ、電車乗ったろ？ 環状線で、この可愛いおっぱいチラつかせてさ」

「え？ そんなの知らな、っあ♡先っぽクリクリ♡だめっ♡」

「水色のうっすいワンピースでノーブラのまま、俺に身体押し付けてきてさ。覚えてねえの？」

上半身の服をブラごと剥ぎ取られたのと同時に、椎名くんの言っている時のことを思い出した。

あれは同学年の女の子たちで吞んでいた大学三年生の初夏。テレビのクイズ番組と一緒に答えて、一番点数が低かった人が罰ゲームを受けること

になったのだ。酔っていたから罰ゲームも過激で、それが『ノーブラのワ
ンピース姿で環状線を一周する』というもの。

最下位だった私を待っていたのは、酔いが覚めても悪ノリを続行させる
友達たち。金髪のカツラとキツめの濃いメイクを施され、別人のような格
好で普段乗らない電車で環状線を一周した。

運悪く南高校の学生でゴった返した車内で揉みくちにされ、散々だっ
た記憶はある。けれど目の前に誰がいたかを、ずっと俯いていた私が知る
はずもない。しかもそれが、椎名くんだったなんて……。

顔色が変わった私を、椎名くんがギラギラした目で覗き込んでくる。

「その子の面影があったからさ、入社ん時に聞いたろ？ その路線乗って
るかって」

「あ、の……乗ったのは一回きりで、いつも乗ってたわけじゃ……きやつ」
敷かれたバスタオルの上に押し倒されて、スカートまでも抜き取られた。

パンツしか身につけていない私を、椎名くんが舌舐めずりしながら見下ろしてくる。

「ふう……俺も脱ぐわ。このまま笹原の上に乗ったら濡れちゃうし」

「えっ。乗ったらだめっ……んむ♡んんっ♡」

起き上がろうとする私を押さえた椎名くんが、有無を言わさず唇を塞いでくる。開いていた口は、簡単に熱い舌を侵入させてしまった。

椎名くんの舌が、私の舌を捕まえて離さない。動くことができず、寝そべって平らになっている私の胸を、大きな手が好き勝手にむにむにと揉みしだく。そのままキュッ♡と乳首を摘まれ、淫みを爪でカリカリ♡引っ掻かれた。

「~~~~っ♡ん♡ん♡」

「はあ……顔とろつとろじゃん。かーわい。そんなに乳首きもちい？」

「あ♡あ♡だめ、だめっ♡」

「んっ……笹原。えろい声、抑えてな？ 完全な防音じゃねえから」

「っ！ ん♡ふっ、んん~~~~ッ♡♡」

椎名くんの忠告に慌てて口を塞ぐも、止まらない彼の指に声が漏れ出てしまう。

「し、椎名く、っ♡触らっ、ないでえ♡」

「むーり。ビンビンに勃起した乳首が、触って♡ って媚びてきてんのに止めれるかよ」

「あ♡あっ♡こ、媚びて♡ ない♡」

「嘘つけ。ピンクだったのに真っ赤な発情乳首になってんじゃん。あー、うまそー」

「っ！♡ やっ♡ やあ~~~~っ♡ 吸わないでえっ♡」

大きな口でぱくん♡とおっぱいを口に入れた椎名くんが、乳首をちゅ~~~~♡と長めに吸いながら乳頭を舌でピン♡ピン♡と弾いてきて、

みぞおち辺りからぞわぞわと快楽が上がってくる。

こんな執拗におっぱいを触られたことなんてない。ジンジン♡と痺れるような感覚が、私の思考を鈍らせる。

ベチャッと何かが落ちる音に目を開くと、椎名くんが私の乳首をねぶりながらスーツを脱ぎ捨てていた。ボタンの外されたシャツの合間から、引き締まった身体がチラチラと見え隠れする。

それだけでもドキドキ♡と胸が高鳴るのに、椎名くんの瞳は……じつと私の顔を見つめていた。目が合ったことで上がった体温が、敏感に椎名くんの舌を感じ取って身体が悶える。

「~~~~~♡ふ……♡っ♡」

「んー？ どした？ 可愛いお腹、やらしくヒクヒクさせて」

「っ♡♡んう……♡♡待っ、……♡」

シャツも脱ぎ捨てた椎名くんが、空いた手でおへその辺りをぐうっ♡

と押ししてきた。そのまま見せつけるように舌を出して、ちろちろ♡と乳頭をもてあそぶ。目が合っているせいで、椎名くん——好きな人に触れられていることを実感してしまう。

その倒錯的な光景に、感じたことのない快感が湧き上がってきた。

「……もしかして、笹原……乳首でイきそうになってんの？」

「んあッ♡ あっ♡ あっ♡ ……っ♡」

「はっ、ざっこ。……ああ、クソッ。誰にこんなよわよわ乳首にされたんだよ」

「ひああッ♡ ひっぱら、ないでえっ♡♡」

「シーッ。風が強くなかったら、隣にえろ声聞かれてたぞ」

「っふ……♡ だ、ってえ♡♡」

「お腹押しながら乳首弄るだけで、そんなになんの？ 開発されてんなあ」

「ちが、っ、ちがうう♡ 椎名くんが、するからなのっ♡ 椎名くんだから」

……あっ♡

「俺、だから？」

嬉しそうな顔でコリコリの乳首をキュッ♡キュッ♡と絞られて腰が浮く。すかさずお腹を押し戻されると、その奥が切なく震えた。

「乳首でイったことねえの？ こんなザコいのに？」

「ん♡ っないからあ♡ あ♡ やめ、っ♡」

「……なら、イけよ。俺で初めての乳首イキして。お口はチャックな」

椎名くんの無理難題に、口元を覆う掌に力が入る。それと同時に、ビンビン♡に尖っていた両乳首の先端を押し潰された。

「……っ！♡ んん……ッ！♡ ふう……あ♡ あ♡」

「ほーら、イク準備しな。トロ顔晒して、乳首でアクメしろよ」

（はああああっ♡ 上に引っ張って、窪みほじほじ♡ されるの、きもちいいッ♡ そんな熱っぽい目でトロ顔見ないでえ♡ 身体あつくなっちゃ

うろう(♡)

——かりかり、かりかり♡ ぐりぐり♡ ぴんぴん♡

「~~~~っ！♡ しいなくん♡ イっ、イっちゃ……っ♡♡」

「イクイクすんの？ ほら、俺の顔見な。……はー、たまんね。そのまま淫乱乳首でイって。ほら、イケよ」

「っイ……ッ♡ あ♡ あ♡ つぁ♡ ぐう~~~~っ!!♡♡」

お腹の底から快楽が駆け巡って、全身が勝手にびくびく♡ びくん♡♡ と跳ねる。腰が勝手に動くのを、今度は椎名くんに止められなかった。逆に褒めるみたいに優しく乳頭をなでなで♡ されて、余韻が抜けな

「ふー……えっろ……。雑魚乳首、マジでイってんじゃん。かーわい……なあ、なんでこの敏感おっぱい隠してた？ 俺ずっと探してたんだけど」
「んむう♡ ん……探し……？」

「俺が大学ん時から好きだった子、電車で真っ赤になりながら乳首チラチラさせてた笹原だよ」

「……え？」

上体を起こして今度はベルトを外しにかかった椎名くんを尻目に、私はまだぼんやりした頭で言われた言葉の意味を考える。

（椎名くんは会社の子を振りまくって……それは大学の頃から片想いしてるからで……それが——私!?!）

導き出された答えに固まっていると、椎名くんが勢いよくスラックスを下ろした。その中から飛び出してきたおちんぽが、自分のお腹をベチンッ♡と叩く。

「ひえ……っ♡」

元彼たちなんか比にならないくらい立派なおちんぽに思わず後ずさる。けれど服からの雨水で濡れたマットはつるつる滑って、思うように離れら

れない。

一人もたついている私の横にしゃがんだ椎名くんは、熱の冷めない目で私のパンツを見ていた。

「笹原もパンツ脱ごうな。雨でびちよびちよだろ」

「い、いや、待って。し、椎名くんが先に服着て。ね？」

「すぐ脱ぐから無駄だろ」

「脱がないよっ」

「笹原のパンツ、濡れてスッケスケでマジえろお」

「っあう♡や、っ椎名くん！　っひ♡」

「かあいいクリがピンッて尖ってんのも、丸見え」

「んああ♡触っちゃ、っ……♡ん~~~~っ♡」

——くちゅり♡くちゅくちゅ♡

「んー？　水じゃねえ音してくるけど？」

「あ♡ あ♡ あ♡ やだあ♡」

「こーら、声抑えてな。あー……乳首と一緒に、クリもザッコ」

「っん~~~~♡ あ……あ……っ♡」

「腰浮かせて、もっと触って♡ してんのえろすぎ」

「してにゃ、いいッ♡ くちゅくちゅだめ、だめっ♡ ~~~~~♡♡」

（クリ押しながらでなで♡ されるの気持ちいいよっ♡ だめなのに……っ♡ あっ♡ ああっ♡ クリの裏筋プルプル♡ 揺らさないでえっ♡

またすぐイっちゃう〜!♡)

「勃起クリ、透けパンにぴったりくっついて、潰しがいあるわー……ほーら、ぐりぐりぐりー……」

「んああっ♡ イくっ、イっちゃう♡ はあ、あっ♡♡」

「声、がーまん。な?」

「むぎ、っむ、んっ♡ んん~~~~っ♡♡」

キスしてきた椎名くんが、そのままクリをぐりゅぐりゅ♡と押し潰しながら、乳首もぎゅう♡と絞り上げてくるから背中をしならせた。

（だめ♡だめ♡身体がいく準備しちゃってる♡足ぴん♡ってな
って、勝手にお腹の力入っちゃ♡上も下も気持ちいいよお♡イ
く♡♡イっちゃうう♡♡）

——びくびく♡♡びくん♡♡

「クリイキした？ は……腰へコえろすぎ。ちんこ痛え」

「あ♡♡やあ……しーなきゅ♡♡ん♡♡」

べちよべちよのパンツを脱がされた刺激だけで腰が震える。力の入らない脚を広げた椎名くんが、その間に身体を割り込ませた。じっと見つめてくる熱い視線に、おまんこがひくひく♡と疼いてしまう。

「えろまんこ、とろつとろのべっちゃべちや。白い本気汁、出てきてんじやん。はー、絶景」

「っだめ♡ 見ないでえ♡」

「なんで？ だろだろまんこはパクパク開いて、もっと気持ちよくして♡
ってまん汁だらだら流してっけど？」

「ああ~~~~♡♡ ゆび、っゆび入れちゃ、っ♡ やだあ~~~~♡」

「こんなにまんこぽってりさせてたら説得力ねえよ。あー……ほら、簡単にGスポ見つかった。雑魚マンすぎ」

「ひっあぁあ♡ しょこっ♡ らめっ♡♡」

「指の締め付け、えぐ……。ぐにぐに押されんの、きもちい？ 腰浮いてきてんね。クリちんぽ見せつけてきて、かあわい。皮剥いてやろーな」

「えっ♡ んあぁッ♡ ~~~~~♡」

「イってビンビン♡ に尖ったクリを剥き出しにされて、腰が大げさにびくついた。そのままきゅむっ♡ と摘まんでくる椎名くん、嫌な予感が胸を掠める。」